

そっとつながる ホッがったわる～ 結ぶ絆から、広がるご縁へ～

「以前比叡山にいた時は、親鸞は天台宗の4つの三昧の一つとして念仏を練習していた.....だが、法然の念仏は、彼にとって全く異なるもののように聞こえ、実際に全く異なるものだったのだ。親鸞が比叡山で唱えていた念仏は完全に彼自身の意志と努力に裏打ちされたものであったのに対して、法然はこの精神的な態度をひっくり返してしまった。念仏とは本来の阿弥陀仏の48の誓いに基づいており、彼の（阿弥陀仏の）意志によって支えられている、法然は親鸞にそう教えた。親鸞は新たな壁に遭遇した。どのように自分の努力を諦め、阿弥陀仏の意志に従っていくのかという壁に。」

さて、私たちのLTDのメンバーがすぐに悟りを達成出来ないことでもどかしさを感じている話に戻しましょう。シッダールタ王子は釈迦牟尼仏になられる前に何年もの間、沢山の苦行に苦しみました。親鸞聖人は比叡山で天台宗の教えを実践することに20年費やし、その後ようやく彼は師である法然上人の念仏に遭遇しました。

ですから、親愛なるLTDメンバーの皆様、絶望しないでください。希望を失わないでください。シッダールタ王子と親鸞聖人の苦悩の日々を頭の片隅に置いておいてください。（あなたの自己努力を手放すことによる）辛抱をして、念仏と阿弥陀仏の48の誓いを通して阿弥陀仏の慈悲が皆様に体現されることを受け入れて下さい。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

私たちのお寺はとても恵まれています。世界でも屈指の文化的多様性を誇るこのトロントに位置しているのです。トロントには200を超える民族的な集団があります。多様性は私たちの日常になっています。どんな背景を持っていようと、誰かがドアを開けて入ってきたら温かく迎え入れます。仏教について興味のある人には教えてあげたいと思っています。みんな違ってみんないいのです。仏教徒はただ仏教徒でありその中に違いはありません。いろんな人が一堂に会し、一体となって念仏を唱えるのです。

私たちの中に違いを見出してそれらに囚われることは簡単です。ですが、違いを認めつつも共通点を見つけていくことで、橋を架けていきコミュニティを成長させることが出来るようになります。

直ぐに悟りを啓くこと



毎年1月から4月までの月末の日曜日、「レッツ・トーク・ダルマ (LTD)」が開催されます。ざっくばらんな議論が出来る開かれた集まりです。最近では、ウルリッヒ・リバーランド氏の「慈悲の瞑想」が始まったところです。これから多くの議論が沸き起こって来そうなテーマです。

この LTD の集まりの中で、直ぐには悟りに到達できないことにもどかしさを感じていると話される方がいらっしゃいます。その話の最後には、仏教徒の最終目的は悟りでは無いのですか？と言われます。

ええっと、ちょっと待ってください。「直ぐに悟りに到達する」という言葉をもっとよく考えてみましょう。

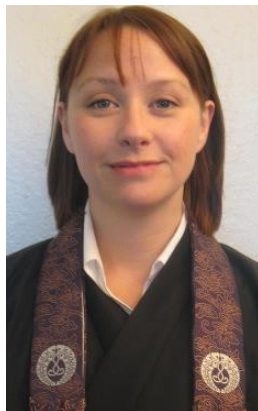
悟り、それは後に正真正銘の仏陀と成られたシッダールタ王子が何年も苦しみ、試行錯誤の末到達した境地です。彼のお話は皆さんよく御存じだと思いますので割愛させていただきますが、彼をしても直ぐに悟りに到達したわけではありません。彼を悟りに導いた「中道」を発見する前に、彼は禁欲的な修練の期間を何年も耐えました。

釈迦牟尼仏も仰られているように、彼も鍛錬した仏法には三つの段階があり、ある形式に則って（当時の弟子たちが彼から直接仏法を聞くことができたでしょう）進んでいき、最後の段階まで行くと仏法自体が滅してしまいます。親愛なる読者の皆様、私たちは（釈迦牟尼仏が実践されたように）仏法が消えてなくなるその最終段階に居るのです。

浄土真宗の創始者でおられる親鸞聖人もまた我々と同じように（釈迦牟尼仏によって実施されたように）、仏法が消失してしまう時代に生まれました。彼は天台宗の総本山である比叡山で辛く厳しい日々を過ごされたようです。20年後、彼は仏教に完全に幻滅し、比叡山を去りました。その後、彼は後の師となる法然上人に出会いました。

（浄土真宗聖典（BCA）161、162 ページより引用）

橋を架ける



佛 心

今月、私は人間の進化の興味深い一面に出くわしました。それは「アイデンティティ」です。私の4歳になる息子が幼稚園に行き始めましたが、違いを認識する面白い方法を見つけられていたのです。彼は視覚的な色による区別をしておらず、それによると肌の色を区別しておらず私たちがしている人種の区別をしていないこととなります。彼はその代わりに言葉で区別しています。人々の話し方には様々なものがあります。そしてより面白いことに、彼が自分がある意味日本人であると認識しているようなのです。理由は簡単、日本語の言葉をいくつか知っているからです。息子の法則によると、「いただきます」が言えれば誰でも日本人なのです。

言葉を慎重に選びながら、私と夫は息子に私たちが日本人では無いけれど、お寺に来る多くの方が日本人や日系カナダ人であることを説明しようとしてきました。また、日本人だからではなく、仏教徒として皆がお寺に集まっていることも説明しました。折よくその会話のすぐ後にお寺の前を車で通りすぎました。お寺の前では誰かが芝を刈っていました。「あの人も仏教徒なの？」彼が聞きます。「ええ、あの人も私たちと同じ仏教徒よ」私は嬉々として答えました。

勿論全ての親が心配するように、私たちも仏教徒という言葉が彼が大きくなった時にどのような意味を持っているかを気にかけており、最近聞いた話でその心配は増えることになってしまいました。端的に言うと「世襲仏教徒」と「改宗仏教徒」の違いについてのお話でした。基本的には、「世襲仏教」は移民と共に北米に持ち込まれたもので、「改宗仏教」は神智学協会により北米に持ち込まれたりアジアを訪れた人が改宗して持ち帰ったりしたものです。二つの異なる流れ。一つは文化的な世襲に依り、他方は個人の探求・興味と軌を一にしています。世襲という言葉は所有権を連想されますし、改宗は侵入者というニュアンスが有ります。このような専門用語の区別によって人々が一丸となることが出来ずバラバラに別れてしまうことを私は危惧しています。

私は更にこんな心配をしてしまいます。人々がこの種の専門用語を使用し続けるとしたら、私の息子の所属を否定するような人のいる社会で、私は彼を育てていくことになるのでしょうか？若しくは子供たちは人種や属性を越えて、皆が共通の信念を持ちながらコミュニティと共通のアイデンティティを形成することができるのでしょうか？はたまた、彼が大きくなって私たちのお寺を旅立ったなら、人々はまだ「白人」としてしか見ずに、私が最近お寺の外で聞かれたという質問をされてしまうのでしょうか？「なぜキリスト教ではないのですか？」「日本が好きだから仏教徒になったのですか？」(日本からカナダに来ていた女性が、私が欧米系のものではなく日本の宗教の僧侶になっていることに腹を立て叱ってきたことがあり、それが私のお気に入りなのですがそれはまた別の機会に譲ります。)または念仏の教えの力強さとその国境を越えて広がる特性によって、世界中で地位を獲得していき仏教が世界標準の価値基準になるのでしょうか？

二〇一六年
十月合併号
浄土真宗
トロント本願寺
本願寺派